

1 研究テーマの捉え方

子どもたちは自発的に人や物などの環境とかわっていくことで、様々なことに気付いたり、イメージを膨らませたり、考えたりする。幼児期に愛情を受けながら受容される体験を繰り返していくことで、自己肯定感が育まれていく。0・1・2歳児は養護を重視した生活において、保育者による愛情がこもった応答的なかわりを通じて、情緒の安定を図っていく。3・4歳児になると、友達とのかわりが広がり、様々な生活、経験を積んでいく。5歳児は、共通のイメージや目的を持って共にあそびを創り上げていく。子ども同士で話し合い、試行錯誤しながら、主体的で協同的なあそびが展開する。こうして、子ども同士が互いの良さに気づき、認め合い学び合う心が育まれていくのである。

こうした育ちとあそびの過程に寄り添いながら、子どもたち一人一人の内面に何が育ってきているのか、また、人とのかわりを通じてどのような育ちが期待できるのか、考えていくことにした。そして、子どもの育ちに繋がる保育計画や環境構成・再構成、援助の在り方についても検討を進めた。

2 視点

生活やあそびの中で、身近な人・物とかわりながら、子どものこころを動かされる体験について探る。

3 研究の方法

- ・ 普段の子どもの様子を丁寧に観察しながら、子どもの思いや願いを読み取り、カンファレンスを行う。
- ・ 保育者同士が共同して捉えた子どもの姿に基づいて、保育計画と実践を展開していく。
- ・ 各年齢の発達段階に応じた環境の構成や再構成、教師の援助を工夫する。

4 評価と反省

初年度は、学年ごとに事例記録や写真を持ち寄り話し合いをする中で、様々な視点から子どもの内面を読み取ることができた。教師は子ども一人一人があそびを中心とした生活体験の中で、どのような育ちが見られたのかを振り返り、子どもの育ちを多面的に捉えていく大切さを再認識した。

2年目は、新型コロナウイルス拡大の懸念から、各園の先生方と集まる機会を十分に作ることはできなかった。しかし、共に研究に参画している他園の事例研究を参考にして、自園での取り組みを進めていくことができた。その際に、教師の思いや考え、子どもの姿を教育・保育要領に照らし合わせることで、子どもの育ちを支援する保育について理解を深めることができた。また、他園の先生方にも事例研究資料を見ていただき、貴重なご意見をいただくことができた。実践と研究を進めることで、各年齢での育ちを大切に捉えらるとともに、目には見えない心の葛藤や揺れ動く気持ちを丁寧に読み取る大切さを実感した。また、子どもの心に寄り添った教師の言葉かけや援助を心がけることで、環境の構成と再構成のポイントを見極めることができるようになった。

子どもたちが、イメージや空間を共有したり、共通の目的意識をもって遊びこんだりすることで、子ども同士の繋がりや試行錯誤が生まれていった。あそびを進めていく過程で、驚きや喜び等の感情を分かち合い、必要に応じて相談し合う「心を動かし学び合う姿」が現れていった。教師は、そうした状況を見守ったり、励ましたり、時には仲間入りしたりすることで、あそびに影響を与える人的環境としての役割を果たしていった。

今年度は、これまでの研究成果を踏まえながら、園内研修の更なる充実を図っている。目の前の子どもの姿から心の動きを読み取り、どのような学びへと繋がり、どのような育ちが期待できるのか考察を深めている。子どもたちの姿をしっかりとして受け止めて保育を構成していくために、引き続きカンファレンスを実施している。教師一人一人が問題意識や職能を高めるとともに、共に子どもを育てる教師集団として切磋琢磨している。

研究テーマ 「遊びを通してこころを動かし学び合う姿を育む」

1 研究テーマの設定

子どもたちの園生活の中心は遊びである。その遊びを通じて様々な環境とかわわり合っている。遊びの中で多様な体験をしたり経験を積み上げたりしながら、「他者とかわわる力」「想像する力」「自分を表現する力」などが育っている。

子どもは、1人でじっくりと好きな遊びに没頭したり、友だちとかわわり合いながら遊んだりしている。日々たくさんさんの遊びを楽しむ中で、子どもの心には何が育っているのか、教師はどのような力を育てようとしているのか、実践研究によって改めて問い直したいと考えた。子どもの姿や思い、つぶやきなどから、遊びを通して学び合う子どもたちの姿に注目して、育ちの過程や教師のさまざまな役割り、環境構成・再構成の在り方について検討していくことにした。

2 研究の視点

- ・「遊び」を通じて育ってほしい子どもの姿を明確にして、そのための環境構成・再構成はどうするのか、教師の役割はどうあるべきなのか検討する。
- ・各学年の子どもたちの今の姿を受け止め、「遊びの中で学び合う」姿とはどのような姿なのか、遊びの中の子どもの姿やつぶやき、表情に注目して、探っていく。
- ・「遊びの中での学び合い」について、子どもたち同士のかかわりに注目しながら考察する。

3 研究の方法

- ① 日々の保育の個人記録や、遊びの様子などから1人ひとりの心の育ちに着目していく。
- ② 各クラスの事例を持ちより、教師間で意見交換を行いながら、子どもの育ちの理解を深め、教師がかかわるタイミングや、声の掛け方など、援助の仕方や環境構成・再構成について考える。
- ③ 上述の方法を用いて、1つの事例を取り上げ、子どもが他者とのかわりの中で、どのような思いを感じているのか、子どもの内なる声に耳を傾け、思いや気持ちを付箋に書き出す。
- ④ 書き出した付箋から子どもの思いに迫り、教師間で共通理解しながら、1人ひとりの子どもの育ちの理解に努め、子どもの気持ちを読み取る視点や、かわり方の幅を広げていく。

4 評価と反省

2019年度は、担任が持ち寄った事例から、気になる子どもの様子や、子どもたち同士のやり取りの姿などを考察し、教師間で意見を出し合った。その中で、「自分だったらこうする」「こうしてみたらどうだったかな？」など様々な意見が出てくる中で、子どもを見つめる視点の違いや解釈の違いについて、個々の教師が気づいていた。

2020年度は引き続き毎日の個人記録を付け、クラス全体の子どもの姿を追っていた。遊びを通して学び合う姿をキャッチして、子どもたちが学び合っている事例を記録に残していた。しかしコロナ禍の影響で、それを教師間で共有し、意見を交換し合う場を設けることができなかった。

それでも、日々の保育の記録を記録することや子どもたちの遊びの姿を「こころを動かし学び合う姿」という観点で読み取っていくことの大切さと難しさを実感した。保育記録を教師同士が共有し合う機会の必要性を感じた1年だった。

2021年度も、担任が持ち寄った事例から、気になる子どもの様子や子どもたち同士のやり取りの姿などを考察し、意見を出し合っている。子どもたちの成長を様々な角度から理解することに努めてきた。

しかし、実際に日々の保育の中で経験させたい遊びや活動から「育ってほしい子どもの姿」を具体的にイメージする教師の力が十分とはいえず、コロナ禍が続く中、保育実践そのものに苦慮することも多かった。そこで発想を転換して、まずは教師の存在そのものが環境になっていることを再認識して、子どもを見守る教師の表情、言動、振る舞いなどを見直していくことにした。子どもに安心感を与えるための言語的・非言語的コミュニケーションの在り方、子どもの気持ちや活動に同調したり、モデルになったり、刺激を与えたりと、臨機応変に関わっていく指導・援助を心がけた。幼児の自発的な活動としての遊びを尊重するためには、遊びが子ども自身の発想や力によって発展していくことが求められる。教師は、遊びの状況を見極めて、遊びから抜いたり、見守ったりする必要がある。遊びにいろいろな影響力を及ぼす教師の多様な関わりについて、実践を通じて学び続けている。

1人ひとりの子どもたちが、遊びを通して様々なことを感じ取ったり、考えたりしている。「もの」「ひと」「こと」との関わりでの充実を図ることで、子どもの学びが豊かになっていく。教師は環境にのらひや願いをこめて、教育的意図を反映させていかなければならない。こうした教師の援助に支えられて、子どもたちの「学び」が充実していくのである。

また、教師同士が日ごろのコミュニケーションを密にしながら、園として「育てたい子どもの姿」を共有することも大切である。日頃から、子どもについて語り、考え合う機会を充実させる取り組みに力を入れていきたい。

研究テーマ 「遊びを通してこころ動かし学びあう姿を育む」

1. 研究テーマの設定

幼稚園の生活は「あそび」そのものである。子ども達は自ら興味をもち、周りにある「人・物・こと」にかかわっていく中で、好奇心や探求心を働かせ、思いを巡らせたり、イメージを膨らませたりしながら、自分がやってみたいことを実現しようとしている。また、友だちと協力しながら試行錯誤を繰り返す過程で、自分の思いを相手に伝えたり、相手の考えや思いにも耳を傾けたりすることで共に成長していく。友だちと遊び、気づき、真似をし、同じことを喜び、一緒にやってみながら、次の新たなことに向かっていく意欲が高まっていく。生活の中で「学び合うところ」が育つためには、人とのかわりが不可欠であると考える。

子ども達一人一人の内面に何が育っているのか、また、人とのかわりを通じてどのような育ちが期待できるのか。子ども達のあそびを通して考え、育ちにつながる保育計画や環境構成、再構成、援助の在りようを検討してみたい。

2. 研究の視点

- ・あそびの中で子どもの「人、物、こと」とかわる姿を丁寧に捉え、かわりの中で心がどのように動いているのか探っていく。
- ・子ども同士のかかわり合う場面に注目して、葛藤したり、試行錯誤したり、協力したりする過程を見とり、共に育つ姿について読み取っていく。

3. 研究の方法

- ・あそびの中での様々なかわり合いを捉え、子どもの「気づき」「思い」「考えている姿」「つながっていく姿」を記録していく。
- ・記録から、子どもの「人、物、こと」とのかわりの在りようを捉え、友だちと協同することであそびや学びがどのような発展していくのか考察していく。また、友だちとの関係性によって支えられ発展していく「対話的で深い学び」を支援する教師の援助について探っていく。

3 評価と反省

1年目の研究をすすめるにあたり、あそびの様子や子どもの心情を細やかに読み取り、教師間で話し合いながら多面的に捉えることが必要であると考えた。研究の手掛かりとして、「なにしてる?」(3歳児)、「それいいね」(4歳児)、「みんなやってみよう」(5歳児)をテーマのポイントに絞り、子どもの「気づき」「思い」「考えている姿」「つながっている姿」を写真に収め、その事例を持ち寄りながら園内研修を重ねた。付箋で教師一人一人が思いや意見を出し合うことで、新たな気づきがあり、個々の子どもを多方面から探ることができた。そこから、子ども達がつながっていくような援助の仕方、環境設定を模索した。

研究班の資料研究協議(11月)では、4園で活発な意見交換ができた。子どもが互いに影響し合うような相互作用を大切にしたい環境づくりをしていくことの必要性、また、ゲームあそびやおにごっこ等のあそびは規範意識の芽生えにつながる経験になるということが再確認できた。「命」については、「答えがない」「わからない」からこそ求め続けることが大事で、子ども同士で徹底的に話し合わせる時間の確保が必要だったことにも気付かされた。

令和2年度は、より深く子どもの心情を探れるよう日々の記録の他に映像(ビデオ)を園内研修に加えた。「対話的で深い学び」につながる教師の援助の在り方を研究の視点におき話し合いを進めてきた。「個のあそび」や「友だちとかわりあって遊んでいる様子」を学年ごとに事例をもちより、子どもの心の動向、環境構成について意見を出し合った。

映像を取り入れたことで、紙面では伝わりづらい表現が感じとれた。その場にいなかった教師も子どもの発した言葉や表情、友だちとの会話をリアルに捉えることができ、意見交換も活性化した。

教師間で話し合いを重ね、その子ども自身の今ある姿を肯定的に受け止め、願いをもってかわかること、また、教師が子ども同士をつなげていく接着剤になっていくことが大切だと確認し合った。

令和3年度も「映像研究」を継続している。4歳児・5歳児は令和2年度と同じ対象児に焦点をあて、周囲の友だちとやりとりしながら遊んでいる姿を追っている。映像から感じられたその子どもの成長を教師間で喜び合いながら対話をしている。3歳児は教師そのものが「環境の一つであること」を念頭におき、その場の教師の動きも含めて撮影をしている。3歳児のあそびと教師のかかわりを照らし合わせ、そこから何を学べるのかを考察していく。子どもの「こころ動かし合っている姿」「学んでいるものは何か」「次の育ちにつながるための経験」「さらに遊びを深めるための教師の援助の在り方」を探っているところである。

この2年半の途中でコロナ禍となり、第2班4園は各園の事例資料を送付し合いながら紙面で研究を進めてきた。他園の事例に登場する子どもの姿を想像し、その子どもの育ちや学びにつなげられる援助の方法や環境づくりを園内研修で探ってきた。顔を含せなかに意見交換ができなかったことは残念だったが、そのやりとりの中で、子どもの何気ない気づきや発見、驚きなどを私たち教師と一緒に感動し、それを子どもにフイードバックすることで思考力や認識力、意欲などの「学びの芽」が育まれるのではないかと考えた。教師と一緒に楽しく遊び、心に寄り添いながらかわっていくことの大切さや、子どもの思いや行為に価値をおくことで様々な力(学び)が育っていくと捉えることができた。子どもにとっての必要な援助の在り方は一つではなく、様々な角度から子どもを理解していく教師のスタンスが大事である。今後とも目の前の子ども達が教科書であり、そこから教師も学んでいくという思いをもちながら、子ども達と生活を共にしていきたい。